

ブラックホールと幻覚*

——メナンドロスのテキスト断片に関する考察——

コリン・オースティン

安村典子 訳

ホメーロスの叙事詩を剽窃したとウェルギリウスが批判された時、ウェルギリウスは批判した者たちに対して、次のように答えたという。ホメーロスから1行を盗み取るよりも、ヘーラクレスからこん棒を奪い取る方がはるかに容易であろう、と——*facilius esse Herculi clavam quam Homero versum subripere*⁽¹⁾。同様にメナンドロスのテキスト校訂者も、テキストに大きな欠落箇所があった場合、そこにメナンドロスが記したとおりの言葉を見事に復元するよりも、宝くじを当てることのほうがはるかに容易であると語るであろう。パピルスに記されたメナンドロスのテキストの多くは、穴だらけである。このようなテキストを読むことは、一見絶望的な挑戦に思われる。しかしこれはそれほど絶望的な試みではないし、またそれほど勝手な憶測しかできないということでもない。そこで、テキストのあちこちに口を開けている空白部分について、詳細にわたって検討すべく、問題に取り組んでみることにしよう。前進するための最良の道がどれなのか、“Miss Conjecture”と彼女の「10人の侍女たち」に相談するために、私が「憶測の滑りやすい道」を下って行く際、あなた方が分別のある、また警戒心を怠らない態度を保ち続けて下さるよう、お願いしたい。奇妙なことにこの作業には、技術と幸運とが同じ割合で必要とされているのである。では、メナンドロスの *Heros* のプロロゴスから始めることにしよう。1911年に出版された Lefebvre によるカイロ版古文書写本によれば、テキストは以下のとおりである。

5 ΓΕΤ/ ΚΑΚΟΝΤΙΔΑΕΜΟΙΔΟΚΕΙΣΠΕΠΟΝΚΕΝΑΙ
 ΠΑΜΜΕΓΕΘΕΣ·ΕΙΤΑΠΡΟΣΔΟΚΩΝΑΓΩΝΙΑΝ
 ΜΥΛΩΝΑΣΑΥΤΩΚΑΙΠΕΔΑΣ·ΕΥΔΗΛΟΣΕΙ
 ΤΙΓΑΡΣΥΚΟΠΤΕΙΣΤΗΝΚΕΦΑΛΗΝΟΥΤΩΠΥΚΝΑ
 ΤΙΤΑΣΤΡΙΧΑΣΤΙΛΛΕΙΣΕΠΙΣΤΑΣ ΤΙΣΤΕΝΕΙΣ:
 ΟΙΜΜΟΙ:ΤΟΙΟΥΤΟΝΕΣΤΙΝΩΠΟΝΗΡΕΣΥ· ΓΕΤ/

ΕΙΤ' Ο[.]ΚΕΡΗΝΚΕΡΜΑΤΙΟΝΕΙΣΥΝΗΓΜΕΝΟΝ
 [—————]ΕΙΤ' ΙΤ[.]ΥΤ' ΕΜΟΙΔΟΥΝΑΙΤΕΩΣ
 [—————]..ΚΑΤΑΣΕΑΥΤΟΝΠΡΑΓΜΑΤΑ
 10 [—————]ΥΝΑΧΘΟΜΑΙΓΕΣΟΙ
 [—————].Ρ[.]: ΣΥΜΕΝΟΥΚΟΙΔ' ΟΤΙ ΔΑ/
 [—————]ΕΠΛΕΓΜΑΙΠΡΑΓΜΑΤΙ
 [—————]..ΕΦΘΑΡΜΑΙΓΕΤΑ:
 [—————]ΜΗΚΑΤΑΡ[.]ΠΡΟΣΘΕΩΝ
 15 [—————].ΤΙΣΥΛΕΓΕΙΣΕΡΑΙΣ: ΕΡΩ: ΔΑ/
 [—————].ΧΟΙΝΙΚΩΝΟΔΕΣΠΟΤΗΣ

始めの7行は完全に保存されており、問題はない。ただし2行目末尾の語は不定詞 *ἀγωνιᾶν* ではなく、Jensen が提案しているように、2人称の *ἀγωνιᾶις* であるかもしれない⁽²⁾。次の8-16行はご覧のとおり、テキストには気分が減入るような直線が引かれている。ここで早くも「空白の恐怖」によって圧倒されてしまうのであるが、しかし幸いなことに、9世紀のビザンティンの文法学者 George Choeroboscus⁽³⁾ が最後の行を逐語的に引用しているおかげで、“Miss Certainty” は矢を的の中心に放つことができたのである。これよりさらに数世紀前、600年頃のやはりビザンティンの小説家、歴史家、修辞学者でもある Theophylactus Simocatta という壮大な名前の人物が、空想に基づいて書いた彼の『書簡集』の中で、この行を暗にほめかしていると思われる部分がある。12行目の冒頭は、すべての校訂者が Croiset の説である *ληρεῖς* を躊躇なく受け入れ、「あなたがどんな馬鹿なことを言っているのか、私にはわかりません」と解釈している。これは *Eccl.* 833 の冒頭に *οὐκ οἶδ' ὅ τι ληρεῖς* とあるとおり、きわめてアリストパネース的なギリシア語であるとみてよい。しかしメナンドロスには単に *οὐκ οἶδ' ὅ τι λέγεις* 「あなたが何を言っているのか、私にはわかりません」との用例が2度あるので (*Dysc.* 827, *Epitr.* 1117)⁽⁴⁾，“Miss Prudence” の促すところに従って、ここは *οὐκ οἶδ' ὅ τι λέγεις* と読むことにしよう。我が友なる Theophylactus はさらに別の点でも、我々に嬉しい驚きを与えてくれる。すなわち彼は、メナンドロスのファンであつたらしく、彼の手紙のいたるところに *Heros* のみならず、*Aspis*, *Georgos*, *Dyscolos*, *Epitrepontes*⁽⁵⁾、その他の一、二の劇⁽⁶⁾からの引用が散りばめられているのである。*Heros* からの引用では、16行目以外でも、登場人物のひとり、ダーオスが語る *πέπουθα τὴν ψυχὴν* (18行) というせりふを明らかに意識したとみられる

言い回しが、『書簡集』15の末尾に見られる。さらに、『書簡集』36には、*Heros* 12-13行が間違いなく反映されているとみられる文章がある。そこでは『書簡集』36の話者エラスミウスが *οἷφ γὰρ ἀλογίστω πάθει συμπέλεγμαι· Μελανίπην...ἐκτόπως ποθῶ* と主張している。このことは、Leoによる *Heros* 12行 *συμ]πέπλεγμαι* の読みが正しかったことを証明するものである。それなら我々は、Theophylactusの *ἀλογίστω* も採用するべきではなかろうか。というのもこの形容詞は、ダーオスがこの時点で陥っている窮地をきわめて良く言い表しているからである。愛は実際、非理性的なものなのだから。Theophylactusの文章では *ἀλόγιστος* は関係代名詞 *οἷος* によって修飾され、「これほどにも非理性的なことがら」とされている。この用法は最上級を伴うことが多いが(eg. *Ar. Eq.* 978 *οἷων ἀργαλεωτάτων*)、形容詞の原形と共に用いられることもある。その場合、ルーキアーノスの *θαυμαστόν οἷον* (*Zeuxis* 6)のように *οἷος* が後にくる場合もあるし、今論じている Theophylactus やデーモステネースの *ἀνὴρ...οἷος ἔμπειρος πολέμου καὶ ἀγώνων* 「戦争や競技に長けた男」(*Or.* 2.18)のように、*οἷος* が後に来る場合もある⁽⁷⁾。今問題にしているメナンドロスのテキストの場合はおそらく、より曖昧な表現で、たとえば次のように書いたのではないかと思われる。

ἐγὼ δὲ συμ]πέπλεγμαι πράγματι/λίαν(οὐ ἄγαν)ἀλογίστω⁽⁸⁾

14, 15行に関しては、残されている行末の数語から、その前にどのようなことが語られていたか、推し量ることが可能である。14行目について、Körteは *κατάρατε* 「呪われた者よ」を入れることを提案している。しかしダーオスは自分が「完全に打ちのめされた」(*διέφθαρμαι*)と言っているのもっと強い言葉の方が適切かもしれない。たとえば *Epitr.* 1080 や断片 71 にあるとおり、*ὦ τρισκατάρατε* というように。15行目は“Miss Probability”も、van Leeuwenの読み *βέλτιστ', ἐρῶντι* を、決して不満としないであろう。8行目のKörteの読み *σοι τυγχάν]εἰ τι* は既に広く受け入れられている。9行目は、最も簡単に読めば *ἄχρι ἂν διαθῆ]* *τὰ κατὰ σεαυτὸν πράγματα* であろう⁽⁹⁾。メナンドロスは *ἄχρι ἂν* を接続法と共に用いた例があり (*Sam.* 159, 394)、また *διαθέσθαι πράγματα* 「問題を解決する」との用例もある(断片 191, 2行目)。10行目ではゲタースがダーオスに同情しているので、*φίλος εἰμί, Δᾶε* 「私は君の友人だ」というようなことを言ったであろう⁽¹⁰⁾。11行目は van Herwerden が *εἰ προσδοκᾶς λυπ]ηρά* と読んでいる。Jensen はこれを少し変えて、*πον]ηρά* とした。この読み方に対して Gomme-Sandbach(388)は「いくぶ

ん平板な表現ではあるが、不可能ではない」と評している。確かに、ἀτ]ηρά
ではあまりに強すぎるであろう。ただしアリストパネースには ἀτηρότατον...
κακόν (*Wasps* 1299) という表現もある。Handley は ὄδυν]ηρά と読むことを
提案している。実際 Jensen の πον]ηρά は、ゲタースの歯に衣を着せぬ物言い
に良く合っており、6行末の ὦ πόνηρε σύ と 17行目の πονηρόν, Δᾶ' の間に置
かれて、うまく収まっている。このように同じ形容詞を繰り返して用いる手法
は、登場人物の個性の違いをさりげなく表現するものであろう⁽¹¹⁾。以上のような
検証により、私たちがまず第1に取り上げた欠損を含むこのテキストは、次
のように復元できるであろう。テストモニアと批判資料も以下に記す。

- (Δα.) οἴμοι. (Γε.) τοιοῦτόν ἐστιν. ὦ πόνηρε σύ.
εἴτ' οὐκ ἐχρήην, κερμάτιον εἰ συνηγμένον
σοὶ τυγχάν]εἰ τι, τ[ο]ῦτ' ἐμοὶ δοῦναι τέως,
ἄχρι ἂν διαθῆ]τὰ κατὰ σεαυτὸν πράγματα ;
10 φίλος εἰμί, Δᾶε, καὶ σ]υνάχθομαι γέ σοι,
εἰ προσδοκᾷς πον]ηρά. (Δα.) σὺ μὲν οὐκ οἶδ' ὅ τι
λέγεις. ἐγὼ δὲ συμ]πέπλεγμαι πράγματι
λίαν ἀλογίστω καὶ δ]ιέφθαρμαι, Γέτα.
(Γε.) ὦ τρισκατάρατε.] (Δα.) μὴ καταρῶ, πρὸς <τῶν> θεῶν,
15 βέλτιστ', ἐρῶντι.] (Γε.) τί σὺ λέγεις ; ἐρᾷς ; (Δα.) ἐρῶ.
(Γε.) πλέον δυοῖν σοι] χοινίκων ὁ δεσπότης
παρέχει. πονηρόν, Δᾶ'. ὑπερδειπνεῖς ἴσως.

(12-13) cf. Theophyl. ep. 36 οἶψ γὰρ ἀλογίστω πάθει συμπέπλεγμαι·
Μελανίπην...ἐκτόπως ποθῶ. (16-17) Choerob. in Theodos. can.,
GrGr IV 1 p. 293, 28 Hilg. (codd. NC, V) τὸ χοῖνιξ χοίνικος πανταχοῦ
συστέλλει τὸ ι, οἶον...πλέον — παρέχει (Fr. adesp. 444 Kock). cf.
Theophyl. ep. 77 ὁ σὸς ἔκγονος ὑπερμαζᾶ...μὴ παρέχου δυοῖν
χοινίκου τῷ παιδὶ περαιτέρω.

- (6) οἴμοι Pap. (8) Koerte, *Ber. Leip.* 60 (1908) 138. (9) Austin.
(10) Austin (Δᾶε Arnott, καὶ van Leeuwen). (11) εἰ προσδοκᾷς van
Herwerden, *Mnem.* 38 (1910) 214, πον]ηρά Jensen, *Herm.* 49 (1914) 424.
(12) λέγεις Austin (cf. *Epitr.* 1117), ληρεῖς Croiset (cf. *Ar. Eccl.* 833).

ἐγὼ δὲ van Leeuwen. συμ]πέπλεγμαι Leo, *Ngg* 1907 p. 317. (13)
 Austin coll. Theophyl., καὶ Sandbach, δ]ιέφθαρμαι Croiset (fort. δι]'
 εφ- Pap.). (14) Austin (πῶς γὰρ vel ποίω, κατάρατε iam Koerte).
 <τῶν> Leo (κατάρ- Att., cf. *Ar. Nub.* 871, *Vesp.* 614, *Lys.* 815, *Ran.* 746).
 (15) van Leeuwen. (16) δυοῖν σοι Choerob. C (Theophyl.; cf. fr. 200
 et 491): δυεῖν σοι N (cf. *Dysc.* 327, var. lect. fr. 411, 1 et vid. Threatte II
 p. 415): δυῶν σε V.

さて次に, *Dis Exapaton* についての考察に進むことにしよう。これは Eric
 Handley が 1997 年に出版した *Oxyrhynchus Papyri* vol. 64 の素晴らしい校訂
 をふまえ, さらに踏み込んだ復元を行おうとの大胆な試みである。いささかの
 戦慄を覚えないわけにはいかないが, “Miss Temptation” に対して誰が「否」
 と言えよう。Handley が転写したところによると, コロム i の左側は以下のと
 おりである。

. . . .
]...[
]...[]ιδ[
]...[]τρ[
].[]ρυ[
]τ.[]ν[
]ν...[]...[]ανς. στ. α[]ε[
]η.[]...[]...[]προίξε...[
].[]οει... δι. πα[]...[
]...[]...τ'ε. ησοικ[]ς[
]...[]φ. δρααρμοττειν. []...[
]υδ. κεινονε. καλ. [
]ν.ν. υθετ. ι...ναν[

このようなテキストに対しては, それを読もうと着手することさえ困難と思
 われるかもしれない。しかし絶望してはならない。私たちは「二重の詐欺師」

(dis exapaton)に相對しているのだから，“Miss Deception”がどれほど厚い毛布を私たちの眼の上に覆いかけようと身構えているか、見てみようではないか。Handleyは1行目の2つの点については、ラムダと、それに続くアポストロフィを考え、2行目は] $\nu\tau\iota\delta$ [であると考えている。また、文字間に隙間があったために $\iota\delta$ の前に [] の記号が付されていた部分には、元々何の文字も記されていないと指摘している。ところでこの場面はプラウトゥスの *Bacchides* と良く似ている。*Bacchides* では厳格な家庭教師リュドゥスと温和な父親ピロクセヌスの2人が、青年ムネーシロクスに対して、ピストクレールス(ムネーシロクスの友人で、ピロクセヌスの息子)を説き伏せるよう勧める場面である。この2人の若者は、メナンドロスではソーストラトスと、モスコスという名前になっている。メナンドロスのテキスト11行目から17行目は、*Bacchides* 494-9行にきわめて良く対応している。このテキスト2行目、] $\nu\tau\iota\delta$ [の前後を埋める文字は、もちろん数種類の言葉を想定することができる。しかし“Miss Possibility”は、それはひょっとすると $\phi\rho\omicron\nu\tau\iota\varsigma$ に関係した言葉ではないか、しかもそれは *Bacchides* 493 の *aegritudine* とも符合するのではないか、と囁きかけてくる。実際、そのように解釈してはならないという理由があるだろうか。この場面はリュドゥスがピロクセヌスに尋ねて、「あなたの息子でもあり彼[ムネーシロクス]自身の友達でもあるピストクレールスが墮落してしまったことを、彼[ムネーシロクス]がどれほど悲しみ、心配して自らを苦しめているか、知っていますか」と語る場面である。

viden ut aegre patitur gnatum esse corruptum tuum,

suum sodalem, ut ipsus sese cruciat aegritudine? (*Bacch.* 492-3)

従って、メナンドロスも次のようなせりふを書いたと考えてもよいのではないだろうか。

$\acute{\alpha}$]λλ'ιδού,

ὡς μεστός ἐστιν οὗτος ἤδη φρο]ντίδ[ων.

$\acute{\alpha}$ λλ'ιδούは *Sam.* 389 の行末と同じであるし、その他の部分については、たとえば断片 341, 2 の $\mu\epsilon\sigma\tau\acute{o}\nu \acute{\epsilon}\sigma\tau\iota \tau\acute{o} \xi\eta\nu \phi\rho\omicron\nu\tau\iota\delta\omega\nu$ と比較してほしい。

このような好調なスタートをきると、その後のさまざまなことも、きちんとふさわしい場所に収まるものである。Handleyは3行目を Σ]ωστρ[ατ と想定し、4行目は] $\chi\rho\nu$ [であり得ると言っている。これは大変興味深い指摘である。というのも、もしこれにさらに、たとえば $\tau\eta\nu$]Χρϋ[σίδα(あるいは対格以外の格かもしれない)を補足すれば、*P. Oxy.* 41 で述べられている Handley 自

身の推察を、大変好都合に裏付けるものだからである。Handley の推察によれば、メナンドロスの劇では黄金と少女は直接的な関係があり、また、少女はバックスではなくクリュシスと呼ばれていたのではないか、というのである。

Handley は 6 行目の末尾には $\Sigma\omega\sigma\tau\rho\alpha[\tau]\epsilon$ が合うと指摘し、7 行目は $\kappa\alpha[\tau\alpha]\pi\rho\acute{o}\iota\xi\epsilon\sigma\theta' \acute{\epsilon}\mu\omicron\upsilon$ で終わっていた可能性があると考えている。6 行目は始めの] ν の後、*P. Oxy. Plate III* の写真から判断する限り、その字の痕跡は $\pi\alpha[\lambda]\alpha[\iota]αν$ と読み得るように見える。従って、6-8 行は、次のような形で甦るのである。

$\lambda\acute{\upsilon}\epsilon\iota \delta\acute{\epsilon} \pi\acute{\iota}\sigma\tau\iota\nu \tau\eta\]\nu \pi\alpha[\lambda]\alpha[\iota]αν, \Sigma\omega\sigma\tau\rho\alpha[\tau]\epsilon,$
 $\acute{\alpha}\lambda\lambda' \omicron\upsilon \mu\acute{\alpha} \tau\eta\nu \Delta\eta\mu\]\eta\tau[\rho]α \kappa\alpha[\tau\alpha]\pi\rho\acute{o}\iota\xi\epsilon\sigma\theta' \acute{\epsilon}\mu\omicron\upsilon$
 $\alpha\upsilon\tau\omega\tilde{\ } \pi\rho\omicron\sigma\eta\kappa\epsilon\iota \kappa\alpha\kappa\omicron\]\pi\omicron\epsilon\iota\nu \tau' \eta\delta\eta \pi\acute{\alpha}[\lambda]\iota\nu.$

「彼は昔の信頼を台無しにしてしまったのだ、ソーストラトス。しかし彼が私にこのような仕打ちをしながら罰を逃れたり、再び悪さをするようなことがあれば、デーメーテールにかけて、そのようなことは絶対にあってはならない」。これと同様にアリストパネース *Eq.* 435 でも、パプラゴニアの奴隷がデーメーテールにかけて同じ誓いを語っている ($\omicron\upsilon\tau\omicron\iota \mu\acute{\alpha} \tau\eta\nu \Delta\eta\mu\eta\tau\rho\alpha \kappa\alpha\tau\alpha\pi\rho\acute{o}\iota\xi\epsilon\iota\dots$)。しかも、アルキロコスの断片 200 West と、アリストパネース『雲』1240 において、この動詞 $\kappa\alpha\tau\alpha\pi\rho\acute{o}\iota\xi\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ が $\acute{\epsilon}\mu\omicron\upsilon$ と共に用いられている。しかし 8 行目の末尾はすべての文字にドットが付けられていることからわかるとおり、この校訂はきわめて不確かである。

9 行目を Handley は $\kappa\]\acute{\epsilon}\lambda\epsilon\nu\acute{\epsilon} \tau' \acute{\epsilon}\kappa \tau\eta\varsigma \omicron\iota\kappa[\iota\alpha]\varsigma$ と復元している。従って、その行の前半に、家の中に入れ、との命令があったと考えることができよう。そこで、最後の 4 行の復元は比較的容易である。

$\epsilon\iota\sigma\epsilon\lambda\theta\epsilon \nu\upsilon\nu \kappa\]\acute{\epsilon}\lambda\epsilon\nu\acute{\epsilon} \tau' \acute{\epsilon}\kappa \tau\eta\varsigma \omicron\iota\kappa[\iota\alpha]\varsigma$
 $\beta\alpha\delta\acute{\iota}\sigma\alpha\iota, \nu\omicron\mu\acute{\iota}\xi\omega\]\mu\grave{\eta} [\sigma]\phi\acute{o}\delta\omicron\rho' \acute{\alpha}\rho\mu\acute{o}\tau\tau\epsilon\iota\nu \acute{\epsilon}[\mu]\omicron[\iota]$
 $\acute{\epsilon}\tau' \acute{\epsilon}\nu\theta\alpha\delta\acute{\iota} \mu\epsilon\iota\nu\alpha\iota, \sigma\]\upsilon \delta' \acute{\epsilon}\kappa\epsilon\iota\nu\omicron\nu \acute{\epsilon}\kappa\kappa\acute{\alpha}\lambda\epsilon[\iota$
 $\tau\omicron\nu \pi\epsilon\rho\iota\beta\acute{o}\eta\tau\omicron\]\nu, \nu\omicron\upsilon\theta\acute{\epsilon}\tau\epsilon\iota \delta' \acute{\epsilon}\nu\alpha\nu[\tau\acute{\iota}\omicron\nu.$

「さあ中へ入って、彼に家から出てくるように命じたまえ。私がこれ以上ここにとどまっているのは、好もしくないと思う。君があの評判の悪い男を呼び出して、面と向かって叱ってやるがよい」。10 行目の $\acute{\alpha}\rho\mu\acute{o}\tau\tau\epsilon\iota\nu$ は *Disc.* 76 におけるのと同様の用法であると思われる。 $\pi\epsilon\rho\iota\beta\acute{o}\eta\tau\omicron\nu$ はここでは 16 行目の $\acute{\alpha}\kappa\rho\alpha\tau\eta\grave{\eta}$ と一対になっている。ちょうどメナンドロスの *Epitr.* 667-8 で、スミクリネースが彼の義理の息子カリシオスの風変わりなふるまいを非難している

のと同様である。René Nünlist は作者不詳の喜劇断片 78K-A が、フィレンツェで最近発見されたパピルス断片と重複していることをつきとめた(ZPE 129, 1999, 54-6)⁽¹²⁾。これは実に優れた指摘である。Ammonius はこの断片を引用して(*Epitr.* の一節であるとは言及せずに), *διαβόητος* 「有名な」と, *περιβόητος* 「不名誉な」の区別について論じているのである⁽¹³⁾。

コロム ii に進んでみると、始めの 18 行と最後の 12 行は、Handley によって見事に言葉が繋ぎ合わされている。しかし中間の 21 行には、言葉や文字が点在するのみで、あるものは行の中程に、あるものは行末に、辛うじてその痕跡をとどめるのみである。Handley は、30 行はおそらく [ἀλλ' ὀρῶ γὰρ τ[ουτο]υί] であろうと考えている。次の 31 行は、より不確実ではあるが、彼は *κο]σμηθέν[τ' ἐ]μ[ὸν πατέρα· τί] ν[ῦν ἀτυχοῦν]τά μ' ὄδ', ὦ[Ζεῦ, κατιδὼν ἐρεῖ ποτε ;* として、32 行は]τά μ' ὦ δω[であろう、としている。これらの読み方を部分的に取り入れながら、私は少し異なる次のような読み方を提案したい。

[ἀλλ' ὀρῶ γὰρ τ[ουτο]υί
παρόντα *κο]σμηθέν[τ' ἐ]μ[ὸν πατέρα· τί] ν[ῦν
ἀτυχοῦν]τά μ' ὄδ', ὦ[Ζεῦ, κατιδὼν ἐρεῖ ποτε ;*

「だが私には、父が最上の衣を身につけて、そこにいるのが見える。このように不幸せな私を見て、ああゼウスよ、父は一体何と言うだろう」。31 行目の *παρόντα* は、*Disc. 773* と同様の用法である。*κο]σμηθέν[τ'* については、*Sam. 733* の *κόσμιε σεαυτόν* (ソーストラトスの父は、アテーナイに帰ってくる息子を歓迎するために、立派な衣装を身につけた?) を参照してほしい。32 行の *ἀτυχοῦν]τα* は、*ἀποροῦν]τα* とも考えられるが、前者の方がよいかもれない。なぜなら、「不幸」という言葉は、ずっと後の 76 行で再び、Handley の読みによれば、*δυσ]τυχ[ἐ]σ[τα]τ[ος]* という形で繰り返されるからである。49-51 行に関して私の提案する読み方は、以下のとおりである。

*μηδὲ ἐν
[ἄπαν μεμ]αθ[ηκῶς ἐγκ]άλει χρηστῶ ξένῳ.*

(B.) *χρηστῶ ;]τί τ[οῦ]το ; [(Σω.) ἦ]χω κομίζων δεῦρό σοι...*

「あなたがすべての真実を知ったからには、正直な主人を非難することはやめてもらいたい」。(バックス)「正直ですって? それは一体どういうことですか?」(ソーストラトス)「私はあなたに……を持ってくるためにやって来たのだ」。

コロム iii の始めの 20 行は、ほとんどの部分が廃墟のような状態である。場合によっては、単語を個別に復元することは出来る。たとえば 70 行の行末は、おそらく ἐξ[απατώ]μενος という語で終わっていると見られる。5 文字分の空白があるからである。しかしこの時点で、“Miss Abstention” が断固として歩みを止めてしまい、多くを語ることを許してくれない。私に言えるのは精々、81 行の ἐπιθυμίαν にふさわしい形容詞として、その行の末尾に ἄ]πανστ[ο]ν δὴ τινα 「飽くことを知らない欲望」⁽¹⁴⁾ を考えると、あるいは 83 行を ὄπερ [ε]ἶπα, μὴ πιστεῦ' ἐκ[είνω] として、すぐに話者が変わったとみなし、]καλὰ καλ[ῶς 「よし、それで良い」と考えるくらいである。この言いまわしは、κακὰ κακῶς (Ar. Eq. 189f.) に対応するが、ちょうどアリストパネースの καλὴ καλῶς (Ach. 253, Pax 1332-3, Eccl. 730) が κακὴ κακῶς (Dis. Ex. 23, etc.) に対応するのと同様である。53 行の μὴ πρόσεχε κένω λόγῳ 「空虚な話に耳を傾けるな」を考慮に入れて Jacques は、この場面ではシュロスを信用しないよう、ソーストラトスが父に忠告しているのであり、その逆(父がソーストラトスに忠告している)ではない、と指摘している。そこで父はその意見に大いに賛成して、καλὰ καλῶς と言い、その後手に負えない詐欺師 γόης ἀκόλαστος の典型的な騙しの行為の例を語る、と解釈するのである。

最後に、Handley は 108 行以下について、次のような復元の試案を示している。

τόν μ' ἐ[κτόπως]φιλοῦντα τὸν πρὸ τοῦ χρόνου
ἔγνω[ν μ' ἀπατῶν]τα,

しかし Handley は親切にも、εὔρο[ν] も、空間を埋めるのにちょうど良い長さの言葉であると、私に知らせてくれた⁽¹⁵⁾。そこで Handley の読みの代わりに、εὔρο[ν κακὸν ὄν]τα と読んでも、“Miss Simplicity” は反対することはないだろうと確信している。

さて次に、Misoumenos について考察しよう。Turner が 1973 年に初めて P. Oxy. 3368 を発表したとき⁽¹⁶⁾、私はすぐに 8 行目の ἀφ' ἐσπέρας は韻を正しくふんでおらず、ἀμφοτέρας は意味をなさないと考えた⁽¹⁷⁾。だが私が提案した読み方に対して、いくつかの批判が寄せられた。その理由は私の読み方が、50 行以下の話の筋、つまり夜になったときに (νυκτός [οὔσ]ης)、トラソーニデスが夜更けに嵐の到来を待っているという筋と、帳尻を合わせることがむずかしい、とみなされたためだった⁽¹⁸⁾。しかしそれは本当に矛盾することだろ

うか。まず第1に、45行目の後に欠落部分があることを考えると、8行と51行が同一の場面で交わされた会話であることは、必ずしも明らかではない。またたとえそうであったにしても、冬の大雨の日に、「夕方」と「夜」とを、明確に区別することができるだろうか。喜劇においては、打ちひしがれた恋人が自分の苦悩を多大なものに見せるために、状況を誇張して語ることは大いに許されているのである⁽¹⁹⁾。時の概念がしばしばきわめて流動的に取り扱われていることは、Ar. *Thesm.* で示されているとおりである。すなわち、*Thesm.* 2行目の ἐξ ἑωθινοῦ と、375行目の ἑωθεν は、厳密に言えば同じ時を意味していない。また、*Thuc.* III, 112 で語られている事件の経過についても留意していただきたい。すなわち初めには、デーモステネースによって軍隊が送られ「夜が訪れたときに」 νυκτὸς ἐπιγενομένης (*noctis adventu*) 丘の上を占拠したと語られる。しかし次の文章では、デーモステネースは夕食後出発し(δειπνήσας ἐχώρει), このことは「夜になるや否や」 ἀπὸ ἑοπέρας εὐθύς (*primo crepusculo*) 起こったとされている。つまり、両方のことが、いわば同時に起こっていることになるのである。Mis. 52行の κατὰκειμαι は、兵士が夜、クラテアとベッドで寝ているというよりむしろ、寝そべて彼女と共に夕食をとっている状況であると考えられる⁽²⁰⁾。ここにおける決定的なポイントは、μέχρι νῦν は通常 *terminus a quo* (起動点) が先に示されなければ、その語だけではその文脈の中で意味をなさないということである。たとえば Phylarchus 81 F 66 (Athenaeus XII, 526C により引用) ἀπὸ πρωὶ μέχρι μέσου⁽²¹⁾ ἡμέρας, Plato, *Laws* XII, 951D ἀπ' ὄρθρου μέχρι περ ἂν ἥλιος ἀνάσχη⁽²²⁾ などの用例のとおりである。どうして批判者たちはこのことを奇妙にも見逃して、重箱の隅をつつくような議論をするのだろうか。

18行でゲタースは、ἀπολεῖ μ' οὐ δρυνός; 「彼は私を殺すだろう⁽²³⁾。彼の身体は櫛の木で出来ているのではないか」と言う。しかしパピルスには、δρυνός の後に、おそらくもうひとつの否定辞 ο]ὕκ が記されていたとみられる。従って、Handley による ὁ δρυνός という読みには、多くの問題が残る。ἀπολεῖ μ' と合わせて解釈するか、あるいは私が考えているように、次のように解釈すべきであろう。

ο]ὕκ ἐᾶ μ' ὑπ[νον
λαβεῖν δ]ιατρίβων γ· ἐγκα(τ) ἐλίπ' ἐσ[πουδακώς,
ἀλλ' οὐδὲ κλ]εῖει τὴν θύραν.

「彼はあんなふうに時間を無駄にすごしており、私を眠らせてくれない。彼

は私たちを見殺しにして大急ぎで行ってしまい、扉も閉めていなかった」。18行目の ὕπνον は Sisti による案であり⁽²⁴⁾、20行目の ἀλλ' οὐδέ は Barigazzi (*Prom.* 11, 1985, 98) による。Barigazzi はまた、27行について、Sandbach の παρῆσθας はパピルスのスペースにしては文字数が多すぎるので、ἔσει σύ γ', ὡς] ἔοικε を提案している⁽²⁵⁾。

従って、29-34行は、次のように読むことにしよう。

(Θρ.) [ἀ]τυχῶ δεινῶς π[άνυ,

30 ἀγωνιῶν, Γ]έτα, <τὰ> μέγιστ'· ἀλλ' οὐδέπω
ἐξῆν καθορ]ᾶν σ'· ἐχθὲς γὰρ εἰς τὴν οἰκίαν
ἐλήλυθας τὴν ἡμετέ[ρ]αν σὺ διὰ χρόνον.
(Γε.) ἐν στρατο]πέδῳ γὰρ[ὡς σ'] ἀπῆρα καταλιπὼν
ἦσθ' εἰκό]τως εὐψυχος...

(29) Gronewald, *ZPE* 78(1989)36. (30) ἀγωνιῶν Austin, Γ]έτα Gronewald, <τὰ> Arnott, *ZPE* 110(1996)29. (31) ἐξῆν Mette, *Lustrum* 25(1983)25. καθορ]ᾶν σ' Turner. (32) ἐλήλυθας] τὴν ἡμετέ[ρ]αν *P. Oxy.* 3369: τὴν ἡμετέρα]ν ἐλήλυθας *P. Oxy.* 3370. (33) ἐν στρατοπέδ]ῳ *P. Oxy.* 3370 (suppl. Gronewald): ἐκ στρατο]πέδου *P. Oxy.* 3369 (στρατο- iam Cockle). ὡς Handley, σ' Gronewald. (34) ἦσθ' Gronewald, εἰκό]τως Turner.

(トラソーニデース)「ゲターズよ、私はひどく不愉快で、苦しみも頂点に達するばかりだ。だが私はまだお前に会うことが出来ない。お前が長い間留守にしていた後に、私たちの家に戻って来たのはまだ昨日のことだからだ」。

(ゲターズ)「あなたを宿営地に残して私が出発したとき、あなたは大変元気そうに見えました」。33行目の στρατο]πέδῳ の前の冠詞の省略については、Kühner-Gerth, i 603 を参照してほしい。

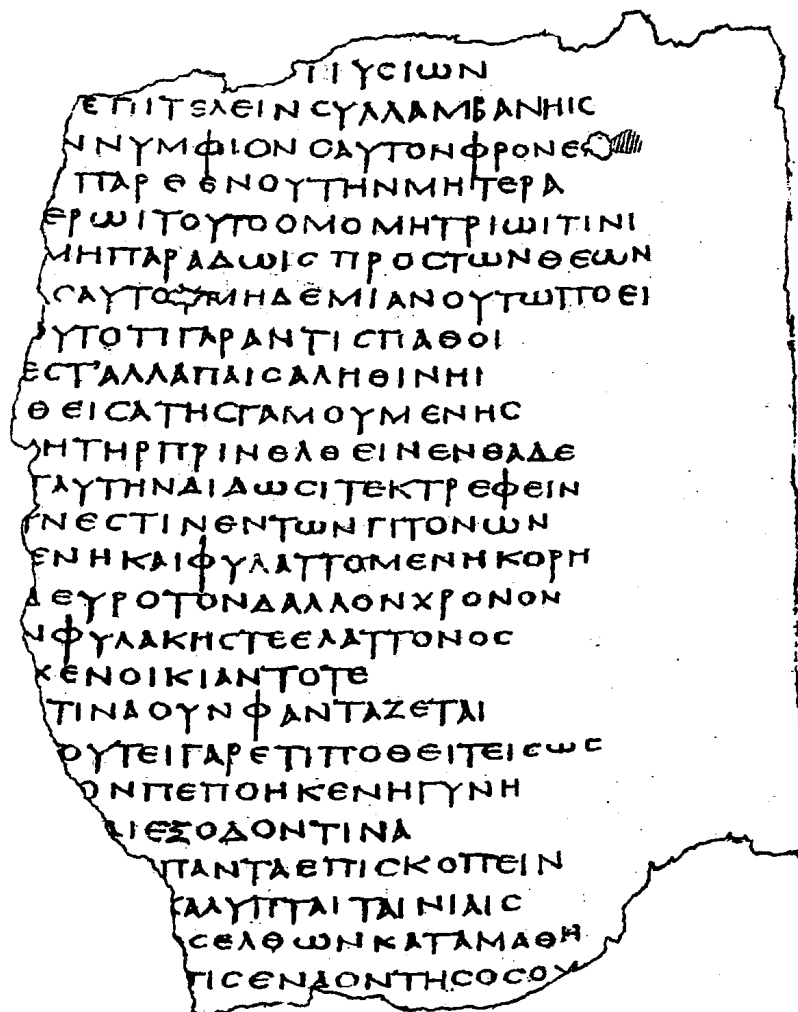
Turner は 41 行に γυνή σ' ὑβ]ρίξει を補っている (*ZPE* 46, 1982, 113)。しかし Turner がアポロニウスの *Syntax* から参照しているこの用例は悲劇断片であり (*TrGF.* 34b, πῶς ἡ γυνή σ' ὑβρισε (-ιξε Uhlig)), ここには当てはまらないであろう。42行について Turner は]αἶναν と読んでいるが、Parsons は]ἡναν と読むことも可能であると指摘している。この2行を、私は次のように補って読みたい。

(Γε.) εἶτα τί

ἐλείν' ὑβ]ρίξει; (Θρ.) καὶ λέγειν αἰσχύνομαι
αἰσχιστον] ἦν ἄν.

ἐλείν' はその 5 行前に、兵士自身が ἐλείν' ὑβρίζομαι (37 行) と語る言葉と響き合っている。これは私が Turner の *P. Oxy.* の 1981 年版で、すでに次のように指摘しているとおりである⁽²⁶⁾。「あなたはどのようにして“敬虔に”虐待されたというのですか」。「言うのも恥ずかしいことです。この上ない恥辱です」。

さて次に、*Phasma* のプロロゴスに目を転じよう。以下は、Jernstedt がセント・ペテルスブルグ大学所蔵の羊皮紙(の裏側)を、手書きで筆写したものである⁽²⁷⁾。



Donatus によるラテン語の説明文 (Arnott による Loeb 版, vol. 3, Harvard, 2000, 406-9 に挙げられている test. VI) は, ギリシア語テキストの復元にきわめて有効であるが, 数カ所において未だ十分に活かされているとはいえない. Körte による Teubner 版 (Leipzig, 1910, 1912, 1938) では, 3 版すべてにおいて 11-2 行は次のように印刷されている.

τίκτει γὰρ ἡ] μήτηρ πρὶν ἐλθεῖν ἐνθάδε
ἐκ γείτονος] ταύτην

ἐκ γείτονος の語を補うのは, Donatus の説明文の句を *ex vicino quodam* と読むことに基づいている. しかしこの読み方は間違っており, Kassel が²⁸的確に指摘しているとおり, Donatus のテキストは, 正しくは *ex vitio quondam* であるに違いない⁽²⁸⁾. 従って, 「隣人」は消え, 母親が「強姦の犠牲者」になることになる. このことは, 今問題にしているギリシア語のテキスト, *Phasma* に, 明確な形で表されなければならない. このためには, 完了受動形 *βεβιασμένη* か, あるいは *βιασμός ἦν* を説明的に加えることが最良の方法であろう. この語は一般的な用法として, *Epitr.* 453 (*βιασμόν...παρθένου*) や, Satyrus の *Life of Euripides* (Fr. 39, vii 8 *β[ια]σμούς παρθένων*) にも用いられている⁽²⁹⁾.

23 行には *κε] κάλυπται ταινίαις* とあるが, これに対応する Donatus のラテン語文章は *transitum intenderet sertis ac fronde felici* である. それによれば, *ταινίαις* の語は次の行に *καὶ φυλλάσιν* を想定し, これに繋がっていたと考えられる. *Wasps* 398 でアリストパネースは, 祭りの場面において *φυλλάσι* を「葉のついた枝」の意味で用いている. Edmonds は彼の著作, *Fragments of Attic Comedy* vol. IIIB (Leiden, 1961, 750) の中で, このプロロゴスを語る神は, 女神ヘスティアであったかもしれない, との独創的推測を行っている⁽³⁰⁾. プロロゴスの最後の 6 行 (20-5) は次のように復元することができるだろう.

πεπόηκεν ἡ γυνή
διελούσα τὸν τοῖχον] διέξοδόν τινα,
αὕτη πρόθυμος οὐσ' ἄ]παντ' ἐπισκοπεῖν.
ἡ γὰρ διέξοδος κε] κάλυπται ταινίαις
καὶ φυλλάσιν, μή τις προ]σελθὼν καταμάθῃ.
25 ἔστιν δ' ἐμοῦ βωμός] τις ἔνδον, τῆς θεοῦ,
τῆς Ἑστίας

- (21) *διελουῖσα* Wilamowitz, *τὸν τοῖχον* Koerte. (22) Austin (*ἄ]παντ'* Sudhaus). (23) Allinson (*κε]κ*-Jernstedt). (24) *καὶ φυλλάσιν* Austin (*et fronde felici* Donat.), *μὴ τις* Kock, *Rh M* 48 (1893)225, *πρ]οσ*-Jernstedt. (25) *ἔστιν δ'...βωμός* Koerte (*έμοῦ* Austin) (26) Austin (*duce Edmonds*)

10行目は、まだ完全に復元されているとはいえない⁽³¹⁾。私の暫定的な試みとしては、*ὄλως ἀποξευ]χθειῖσα τῆς γαμουμένης* 「花嫁から完全に引き離されて」のような語句を含んでいると思う (*ἀποξευγέω* はエウリーピデースが好んで使う動詞である。Phoen. 988 に付けられた Mastronarde の注を参照)。あるいは *Dysc.* 577-8 (*τοῦ δεσπότου... λάθρα*) のように、属格 *τῆς γαμουμένης* を *λάθρα* にかけて、*λάθρα ποτ' εἶσα]χθειῖσα τῆς γαμουμένης* 「花嫁が知らない間に、ずっと以前に家の中に連れられて来て」の方が良いかもしれない。ここの *λάθρα* は Kock が最初に提案したもので、もしこの復元が正しいとすれば、14行も *χωρὶς τρεφομ]ένη* と補うことができるであろう (*Sic. Fr.* 1 の *ἔτρεφε δὲ χωρὶς* を参照)。13行目もまた、Kock の *τίτθη* 「保母」あるいは *τήθη* 「祖母」の代わりに、*μαίρα* 「乳母」と読むことができるだろう。これらの老齢の女性を表す用語に関しては、Handley が *Dysc.* 386f. に付けた注において論じている。この *Phasma* のプロロゴスについては、大胆な復元の試みをさらに続けることもできるが、今日はこのあたりで終わることにしよう。“Miss Sanity” と “Miss Moderation” がこのように叫んでいる。

Miser Coline, desinas ineptire

Et quod vides perisse perditum ducas.⁽³²⁾

これまでの *nugae*、他愛もないおしゃべり、を聞いて頂いた後のお別れに、*Perinthia* の3世紀のパピルス断片を紹介しよう。これは Grenfell と Hunt が1908年に発表したもので、1年後に Körte により、*Perinthia* の断片であることが確認された。ところが何らかの理由で、この写真版はそれを所蔵しているボードレイアン博物館から、ついには出版されることがなかったのである。従って今お見せする写真版は、世界初公開のものである。ご清聴、ありがとう。

追記

最近出版された *Oxyrhynchus Papyri* vol. 68, London, 2003 には, *Epitrepontes* (*P. Oxy.* 4641) と *Kitharistes* (*P. Oxy.* 4642) の, 歓迎すべき追加断片が掲載されている。これは共に, René Nünlist により編集されたものである。*Epitr.* 17 を Nünlist は, (Συ.) ἔρ]ρωσο καὶ τὸ κατὰ σὲ πρόσμ[εινον μόνου, (シュリスコス)「さようなら。それからあなたに関して言えば, あなただけはちょっと待って下さい」と読んでいる。しかし私はもっと具体的な命令が要求されていると思う。たとえば, πρόσμ[εν' αὐτόθι「まさにこの場で待っていて下さい」か, あるいは ἐκποδών「ずっと向こうの方で」の方がよいかもしい。*Kith.* 4 行目は, 明らかに ὄ[θ'] οὔτος と補うべきであるのに, Nünlist はこれについて何も言及していない。ὄτε は *Ar. Ran.* 22 (ὄτ' ἐγὼ κτλ.) と同様の用法である。従って, 3-4 行は次のようになる:

ἄπ]αντὰ γ' ἂν τις ὡς ἀληθῶς ἐλπίσ[αι,
ὄ[θ'] οὔτος ἡμῖν αὐτὸν οὐ τίθῃσ' ἴσον,

「何だってあり得る, 実際のところ。この男(パニアース)が, 自分を我々と対等であると見なさなければね(i. e. 我々を見下すことをしなければね)」。この前の行でパニアースは「洗練された」(γλ]αφυρός, suppl. Handley), あるいは「おせっかい者」(πραγματοκοπεῖ) と称されている。

Col. ii.

.
[.]·συδακολουθει[
[.]·ασεξεισινφερωντοπυρ[
καιπυρ·προδηλον·ωτιβειεκαιγετα
επειτακατακαυσειμ'αφειητ'ανγετα
5 [. . .]δουλονοντα·καιδιασωσαν[. .]υπανν.
[. . .]ανμ'αφειητ'αλλαπεριοψεσθεμε·
[. . .]·προσαλληλουσεχομεν·προσερχεται
[. . .]ριασ·οσονγεφορτιονφερων
[. . .]λωλα·καιδαιδ'αυτοσημμενηνεχων
λαχ

Col. i.

10 [.]·ολουθει : περιθετ'ε[.]κυκλωιταχυ
[.]·ιδειξαιδαιτηνπανουργιαν
τεχνηντινευρωνδιαφυγωντ'ενθενδεμε

.
]

]]χοι

τεχνηνέγώ: ναιδαετομεναπραγμονα
καικουφονεξάπαταναγαρεστιδεσποτην

]

15 φλυαρος : ηην : ειδειστηνητωνφρενων

]

στακτην : εκνισθήσ : ουχιπροσσουδεσποτα

]βωσ

ομενπονηροσ·οθρασυσενθαδ'αρτιωσ

]

κατατωνσκελωντηγκληρονομιανφι[.]τατο[

.

[.....]οδων·εξεινχαριν

λαχ

20 [.....]συφημων : καετ[.]

[.]ιασ

[.....]ωσαφικετο

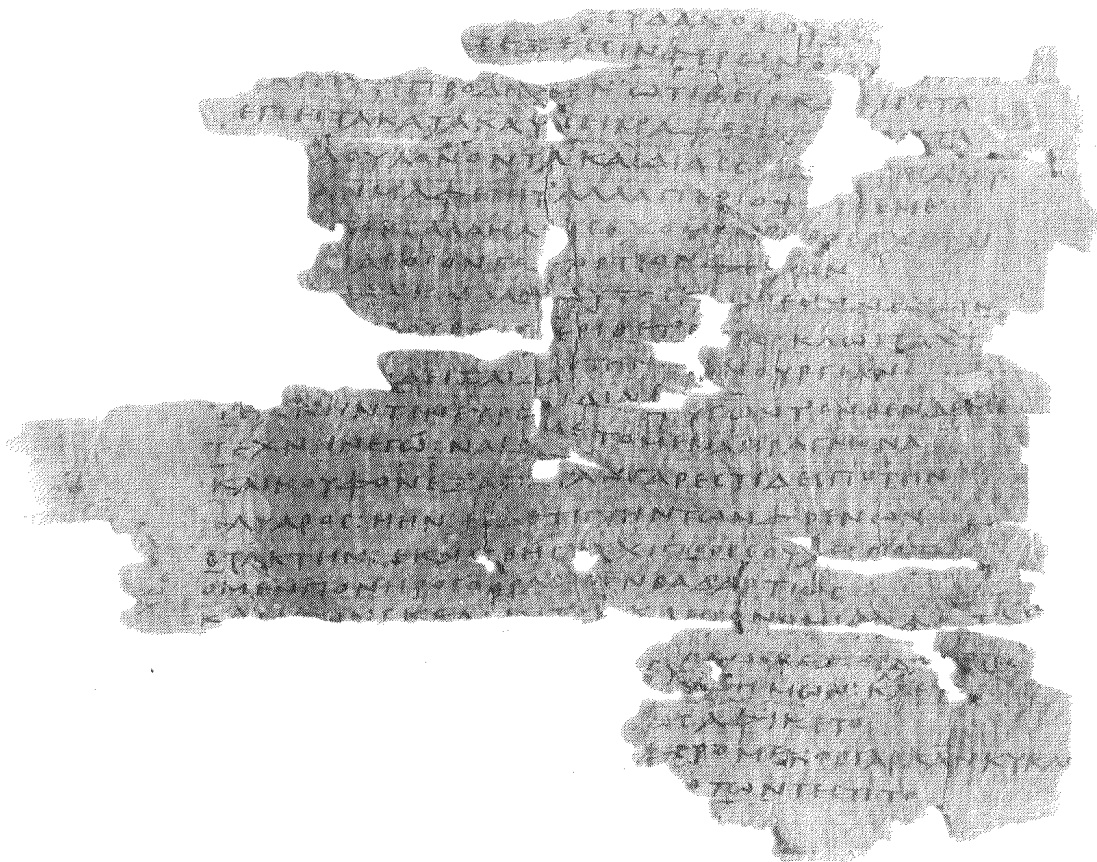
[.....]φερομενοσγαρκανκυκλω[

[.....]ρτωντεστιτο

Unplaced fragment . . .

]τιβ[

. . .



Menander, *Perinthia* : P. Oxy. 855. オックスフォード大学ボードレイアン 図書館の許可により複写(=Ms. Gr. class. e 99[p.]).

* 本稿は2004年6月6日に立命館大学で行われた、第55回日本西洋古典学会における講演原稿である。これに先だち、2004年3月23, 24, 26日に、ボローニャ、パルマ、ウルビノの各大学でも、同様の趣旨の講演が行われた。ヴィニチオ・タマロ教授、ガブリエーレ・ブルザチーニ教授、フランカ・ペルシーノ教授、並びに中務哲郎教授、安村典子教授と、彼らのすべての同僚に対して、イタリアと日本に招待頂き、手厚い歓迎を受けたことを、妻ミシュトゥと共に、深く感謝申し上げる。また、ジャン-マリー・ジャック(ボルドー大学)、エリック・ハンドリー(ケンブリッジ大学)、ルドルフ・カッセル(ケルン大学)の各氏に対しても、彼らの鋭い指摘と助言に感謝したい。言うまでもなく、この原稿はテキスト出版の最終原稿ではなく、創造的な復元への実験的な試みである。これを決定稿にするためには、内容と文章の両面において、さらに厳格な検討がなされなければならない。

注

(1) 4世紀の文法学者 Aelius Donatus による『ウェルギリウスの生涯』46節(ed. C. Hardie, *Vitae Vergilianae Antiquae*, Oxford, 1966, 2nd ed., 18).

(2) *Hermes* 49, 1914, 424. O. Guéraud はどちらの読み方も可能であるとし、「パピルスにどちらの方向から光をあてるかによる」と述べている(*BIFAO* 27, 1927, 130).

(3) George Choeroboscus は従来6世紀前半の人であるとされてきた(A. C. Pearson, *The Fragments of Sophocles I*, Cambridge, 1917, lxxiv). 9世紀との説は、R. Kassel が私に指摘してくれた資料, Chr. Theodoridis, *BZ* 77, 1980, 341-5による。さらに、Kl. Alpers, *Das attizistische Lexikon des Oros* (Berlin/New York, 1981, 91, n. 25), N. G. Wilson, *Scholars of Byzantium* (London, 1996, 2nd ed., 69-70, addendum 277) 参照。

(4) *Epitr.* 1127f. と, *Peric.* 504f. の οὐκ οἶδ' ὅ τι λέγω, 並びに *Sic.* 107 参照。

(5) *Asp.* 248f. ~ *Epist.* 22 (τὸ τῆς τύχης... ἄδηλον), *Asp.* 402f. ~ *Epist.* 24 (ράγδαῖος σκηπτὸς ἡμῖν ἐνεδήμησε), *Georg.* 77f. ~ *Epist.* 29 (πεπαύμεθα πενία μαχόμενοι δυσνουθετήτῳ θηρίῳ καὶ δυσκόλῳ), *Dysc.* 3f. ~ *Epist.* 5 (πέτρας... γεωργεῖν, but cf. also πέτρας... γεωργοῦντες at *Isocr.* 8. 117. これは Kassel, *Kl. Schr.*, Berlin/New York, 1991, 293 の指摘による。また, Degani の *Hippon. Fr.* 36, 4f. σκάπτειν/πέτρας に関する注も参照せよ)。 *Dysc.* 376 ~ *Epist.* 59 (αἵμασιᾶ), *Epitr.* 207-9 Nünlist (fr. 6) ~ *Epist.* 61 (ἀργὸς γὰρ ὦν ἀθλιώτερος εἶ τοῦ πυρέσσοντος, ἐσθίων μάτην διπλάσια)。

(6) 特に, 作者不詳喜劇断片 1147, 10f. ~ *Epist.* 36 οὐχ ὀρωμένης ἐρῶ. さらに Zanetto, *Theophylactus Simocatta Epistulae* (Leipzig, 1985, 70, Index auctorum, under "Menander"), A. Barbieri, 'La circolazione dei testi menandrei nei "secoli ferrei" di Bisanzio: la testimonianza del epistolario di Teofilatto Simocatta' in *Medioevo Greco (MEG)* 3, 2003, 43-51 参照。

(7) この慣用語法については, *LSJ* s. v. οἶος II.7, Kühner-Gerth, i, 28 参照。

(8) あるいはむしろ, たとえば, ἀλογίστῳ συμ]πέπλεγμαι πράγματι/ἔγωγ' ἀληθῶς (vel sim.). van Leeuwen の ἐγὼ δὲ も, 11行目の σὺ μὲν を受けているので, 大変優れた復元である。

(9) van Leeuwen の ἕως ἄν εἶθ' ἰθὺς (θῆ Vollgraff, *Χάριτες F. Leo*, Berlin 1911, 58) も, 同じ意味となる。しかし van Leeuwen の場合は「アナパエストの分離」

を避けるために、*σεαυτὸν* も *σαυτὸν* に変えなければならない。

(10) Cf. *Dysc.* 615, *εἰμὶ γάρ, ἀκριβῶς ἴσθι, σοὶ πάλαι φίλος.*

(11) W. G. Arnott は、彼の論文 “Menander’s manipulation of language for the individualisation of character” (eds. F. De Martino and A. H. Sommerstein, *Lo Spettacolo delle Voci*, Bari, 1995, 147-64) の中で、奇妙にもこの問題を見逃している。その点を除けば、彼のこの論文は要点を余す所なく網羅したカタログといえよう。

(12) C. Austin, “L’ Arbitrage de Ménandre”, *Ist Pap. “G. Vitelli”*, *Comunicazioni* 4, Firenze, 2001, 12 参照。

(13) *De adfinium vocabulorum differentia*, 136 節, *διαβόητος μὲν γάρ ἐστιν ὁ ἐπ’ ἀρετῇ πολυθρύλλητος, περιβόητος δὲ ὁ ἐπὶ κακίᾳ.*

(14) ボローニャ大学の Camillo Neri 博士は、*ἄ]πληστ[ο]ν* との案を提案しているが、Handley は *η* の右半分ではなく、むしろ *ν* であろうと記している。

(15) Tammaro はこの読みの例証として、*Dysc.* 716, *εὖρον οὐκ εὔ τοῦτο γινώσκων τότε* を挙げている。

(16) “The Papyrologist at Work”, *GRBS Monogr.* 6, 1973, 49 並びに図版 8.

(17) *Plaut. Curc.* 4, *si media nox est sive est prima vespera.* これについては、*CGFP*, Berlin/New York, 1973, 144, *ZPE* 13, 1974, 320 参照。

(18) たとえば、G. Mastromarco, *Corolla Londiniensis* 3, 1983, 82, n. 5; A. Barigazzi, *Prometheus II*, 1985, 103; F. Sisti, *Menandro Misumenos*, Genova, 1985, 86f.; F. Ferrari, *Menandro e la Commedia Nuova*, Torino, 2001, 989 参照。

(19) V. Citti, *Atene e Rome*, 28, 1983, 73f. によって指摘されているとおりである。Citti は私の試案を受け入れ、さらにきわめて適切にも、*Luc. Gall.* 1 の *οὐδέπω μέσαι νύκτες εἰσίν, ὁ δὲ (scil. ἀλεκτρυόν)*...*ἀφ’ ἐσπέρας εὐθύς ἤδη κέκραγεν* を引用している。

(20) *κατάκειμαι* が「寝そべて食事をする」という意味に用いられた例としては、*Plat. Symp.* 175 C, *LSJ* s. v. 7.

(21) Tammaro が指摘しているとおり、Kaibel の *μεσοῦ (σης)* は不必要である。*Hdt.* VIII 23 *μέχρι μέσου ἡμέρης*, *Thuc.* III 80, 2 *μέχρι μέσου ἡμέρας* を参照。

(22) Tammaro はさらに、*Hippocr. Epid.* VII 5, 6 (V 374, 12 L.) *ἀφ’ ἐωθινοῦ μέχρι ἐς μέσον ἡμέρης*, *Vict.* IV 89, 10 (VI 650, 7 L.) *ἀφ’ ἐσπέρας πρὸς ἠῶ*, *Aeschin. Ctes.* 132 *ἀφ’ ἡλίου ἀνιόντος μέχρι δνομένου*, *Phil. Iud. Spec. leg.* I 296 (V 71 Cohn) *ἀφ’ ἐσπέρας ἕως πρωΐας*, II 155 (123) *ἀφ’ ἐσπέρας ἄχρι τῆς ἕω* の各用例を追加している。

(23) *ἀπολεῖ μ’* は激怒した時の口語的表現である。Austin and Olson による *Ar. Thesm.* 2 に関する注を参照 (Oxford, 2004, 52)。

(24) 注(18)に挙げた Sisti の著作 27 頁参照。さらに、M. Gronewald, *Kölner Papyri* 7, Opladen, 1991, 3, “Am Ende vielleicht...[ο] *ὑκ ἐᾶ μ’ ὑπ[νοῦν]*?” James Diggle による親切な指摘によれば、通常は *ὑπνος τινὰ λαμβάνει* と言うのであり、*ὑπνον τις λαμβάνει* とは言わない (Theophr. *Char.* 7, 10 に付けられた彼の注を参照)。この箇所の曖昧さを取り除くために、彼は次のような魅力的な提案をしてくれた。すなわち、*ὑπ[νου/τυχεῖν]* を補うか (e. g. *Ar. Ach.* 713, *τοὺς γέροντας οὐκ ἐᾶθ’ ὑπνον τυχεῖν* のように)、あるいは *λαχεῖν* (e. g. Theophr. *Char.* 25, 6 *οὐκ ἐάσεις τὸν ἄνθρωπον ὑπνον λαχεῖν* (Abresch: *λαβεῖν* V) のように) を補うか、との案である。

(25) *ὡς]* を初めに提案したのは W. Cockle である。

(26) Vol. 48, p. 16. これに対して Handley は、それまでに述べられた事情により、ゲタースが実際には「哀れな虐待」など何もなかったことを驚いていると想定し、トラソーニデースの言葉を捉えて $\epsilon\acute{\iota}\tau\alpha\ \tau\acute{\iota}, / \tau\acute{o}\ \delta(\epsilon)\ \acute{\iota}\nu', \acute{\upsilon}\beta] \rho\acute{\iota}\xi\epsilon\iota$; と語ったのではないかと提案している。

(27) *Porphyrrii fragmenta Atticae comoediae* = Zapinski *Ist-Fil. Fak. Imp. S. Petersburg Univ.* 26, 1981, 152. 見開きの図版からの複製による。

(28) Turner, *GRBS* 10, 1969, 308, n. 7; O. Zwierlein, *Der Terenzkommentar des Donat im Codex Chigianus* H VII, 240, Berlin, 1970, p. 155 参照。V 写本は vitio, BK 写本は vicio, TC (=vulg.) 写本は vicino. しかし *quodam* の代わりに *quondam* を初めに提唱したのは J. van Leeuwen (*Menandri fabularum reliquiae*, Lugduni Batavorum, 1919, 3rd ed., 172) である。

(29) 最近発見された、ヴァチカン所蔵の重ね書き羊皮紙に記されている作者不詳の劇の 32 行, $\acute{\epsilon}\tau\epsilon\kappa\epsilon\ \beta\acute{\iota}\alpha$ [を参照。さらに, F. D' Aiuto, *Tra Oriente e Occidente*, ed. L. Perría = Testí e Studí Bizantino-Neellenicí, 14, Rome, 2003, 272 も参照せよ。現テキストにおいては, $\beta\acute{\iota}\alpha$ [ι, $\beta\acute{\iota}\alpha$ [σμη, $\beta\acute{\iota}\alpha$ [σθεῖσ' の読み方も可能。

(30) *Phasma* のプロロゴスは神によって語られたとの Wilamowitz の仮定は、正当であったと思う (*Schiedsgericht*, Berlin, 1925, 143, n. 1)。Wilamowitz のこの指摘は, D. Bain, *Actors and Audience*, Oxford, 1977, 187, n. 4 に取り入れられている。

(31) この行に関するこれまでのさまざまな試案は, A. Barbieri, "Ricerche sul *Phasma* di Menandro", *Eikasmos*, Studí 7, Bologna, 2001, 39-43 に論じられている。

(32) (訳者注)「哀れなコリン, 馬鹿げたことを話すのはもうやめよ。あなたが見ている過去のものは, もうとうの昔に過ぎ去ったものであると考えるがよい」。オースティン教授は Catullus 8, 1-2 を用いて, ここで本論文タイトル(「幻覚」)の謂われを解き明かしている (Catullus では "Miser Catulle,", 「哀れなカトゥールス, ..…」, 以下はオースティン教授の引用と同文)。

コリン・オースティン(ケンブリッジ大学)

安村典子(金沢大学)